

第2回 仙台国際音楽コンクール

SENDAI INTERNATIONAL MUSIC COMPETITION



拍手するあなたも審査員

コンチェルト

コンクールニュース Vol.7

2004.7.12

広報宣伝サポートボランティア狂詩曲13番？！

神出鬼没の広報宣伝サポートボランティア・いろいろなところで楽しい話、「へー」っていう話、素顔の出場者に会いました。大変だ・って思って取材を始めたけれども結構みんな楽しんでいました。世界に羽ばたこうとする演奏家と話せたこと、いい思い出になりました。この「コンチェルト」を会場で読んでいる人を見かけた時、「それ・私たちが作ったんですよ」って話しかけたくなりました。読んでくださってありがとうございました。さらに私たちが見聞きたコンクールをお伝えしたいと思います。

再びの拍手をチャレンジャーたちへ

第2回仙台国際音楽コンクールも成功裡のうちに終了。宴の後の一抹の寂しさを実感しているのは私だけではないでしょうね。出場者の熱い心の演奏を聴き、感動し、この素晴らしい音との出会いが、何ものにも変えられない私のボランティア活動の糧となっていることを再認識します。出場者にとって一期一会のコンクール、最高の状態で演奏舞台を用意してあげることができたのだろうか、いつもそんな思いで活動していました。出場者にはこれからも研鑽の日々が続くことでしょう。このコンクール（仙台）が彼ら彼女らにとって記憶に残る

ターニングポイントの地であって欲しいと願いつつ...。いろいろな国の出場者の刻（とき）がくれた演奏を再び聴く機会に恵まれたら、もう一度思いっきりの拍手をしてあげよう。ヴァイオリン部門第2位のマクシム・プリンスキー（ウクライナ）の言葉、「演奏者はどんな場所、どんな時でも1回々々最高の演奏をします。それでも、いつもいくつかの課題が残ります。それをクリアして次に繋げていきます。最高の演奏にトライしてゆく、それは僕たちにとって当たり前のことです」彼は第1回目セミファイナルには進めなかったが、今回見事2位入賞。刻（とき）が彼にもたらした。（吾妻）

出合いに感謝！

第1回目は友達に誘われて会場運営に携わり、チケットのもぎりや当日券の販売など生まれて初めての経験だったが、他のボランティアの人達と仕事ができ、感動の日々であったことを思い出します。

今回は広報宣伝に参加、老若男女が集まっての活動は集まりが殆ど夜のため、毎回は参加できませんでしたが、充実感を味わうことができ感謝しています。6月はピアノ部門、チケットを買って聴くことも一つの参加、合間を見つめ聴きに行きました。（徳藤）

忘れられないインタビュー

広報宣伝サポートボランティアというと、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか？関連情報を集め、関係者への取材、記事を書き、編集して発行...と、やはり紙面と向き合って締め切りに追われながら文章に取組む姿でしょうか。印刷して関係各所に配布したり、プログラムに折込んだり。そう、その通りなのです。しかし、想像力の無い私は何も考えず「コンクールをもっと身近に感じることができるかな」と軽い気持ちで申し込んでいたから、さあ大変。何と出場者にインタビューをするという、この上なく嬉しい、それでいて緊張感

いっぱいのスゴイ体験をすることになってしまったのです。待っていると...その出場者はステージのオーラそのままに一人颯爽と歩いてきました。その出場者は、家族と共に安心してように談笑しながら現れました。その出場者は、緊張感のとけないまま、でも目があうとニコリして近づいてきてくれました。笑顔を輝かせて話してくれた出場者、静かに一言一言を噛み締めるように語る出場者。音楽を愛する情熱、それを語る澄んだ眼差しは脳裏に焼き付いています。通訳の出場者サポートボランティアの皆さんに励まされながらのインタビューは、彼等の演奏と共に忘れられない思い出になりました。（岡）

たくさんの音楽聴けて幸せ

あつという間の1年間。楽しかった。多くの良き人と交わりができたこと。毎週1回けんけんがくがく話した。そして皆とお酒を飲んだこと。それにみんなの奉仕溢れる精神に接したこと。お金にならないボランティアなのに懸命に尽くすその姿に敬服しました。無償の奉仕の素晴らしさに感動しました。ハイレベルで次々と高度のものを完成させるのだから見上げたものだ。活動としては「コンチェルト Vol.5」の編集長、神野小学校での学校訪問コンサートの取材、折込み2000部など。音楽会にもたくさん参加した。「まちかどコンサ-

ト」には殆ど参加。コンクール出場者の演奏は、青年文化センター、カワイ楽器、喫茶店でのミニコンサート、チャレンジャーズ・ライブなど。通訳を交え6人の外国の出場者へのインタビュー取材もできた。これはめったにできない体験。ボランティアをして良い体験ができ、今では嬉しく思っている。ありがとう。(長内)



みんなグッドラック!

ヴァイオリン部門のロマンさん。特徴のある髪型(マッシュルームカット)を覚えている人も多いと思う。帰国前、髪型が変わっていたのに気づきましたか。ホームステイ先のおばあさんにカットしてもらったそうです。「チェコに戻ったら母にこれと同じ形に切ってもらいます」と言っていた。ピアノ部門のヴァーツラフ・マーハさん、セミファイナルの時、菊地裕介さんのCDを買ったそうです。デバ地下が大好き。「14や三越は閉店前に行くのと安くなるので、刺身、寿司、てんぷらを買ったよ」と。チェコに帰る日見送りに行った。「これ」と彼が私にくれたのはキムチ、塩辛、ピザ生地だった。「デパートのおばあさんがくれたんだ」、仙台市民と買物で交流していた。

我が家はホームステイ受け入れにも申し込んでいた。ヴァイオリン部門は2位になったマクシム・ブリリンスキーさん。ガラコンサートの翌日1番の新幹線で成田へ、そしてウィーンに帰国。ピアノ部門は急に受け入れが決まり、アメリカのカルロスさん。彼は予選の結果を聞いて翌日帰国。結局二人とも我が家には来なかった。二人に送ったメッセージは「ファイナルまでホテルに長く滞在できますようにと祈ってます。グッドラック!」。楽器から離れた出場者はとても素敵な若者でした。シャイな女の子でした。私は自分の好きな音に出逢えました。みなさんはいかががでしたか? 広報になってとても楽しい時を過ごしました。沢山の仲間ができました。ありがとう出場者のみんな。(栗原)

サインよもやま話

コンクール前半のヴァイオリン部門の出場者から、公式プログラムの写真に次々とサインをもらっているKさんの姿があった。なるほどそういう交流があるのだと納得した。○年後、大スターになっているかも知れないのだ! 松陵小学校にトムス・オストロフスキスさん(ラトビア)とウィリアム・マクナリーさん(アメリカ)が訪問し、ミニコンサートを開催した。小学生の目が輝き、楽しい国際交流のひと時だった。その時丁度持っていたのが公式プログラム。二人にサインをお願いして、今度はニコニコしたのが私だった。クラシック大好きの

学友T君がいる。「コンチェルト」を発行の度に渡しコンクールに誘っていたが、公式プログラムを見て彼は驚いた。こんな世界的な人が審査委員としてここに来ていたとは・・信じられない。昔の原盤があるのでそれにサインをして買おうと会場にやってきた。そして、セシル・ウセーさん(フランス)とエリソ・ヴィルサラーゼさん(ロシア)からLP盤にサインをして買った。ウセーさんは若い頃の写真が表に写っているのを見て、「Beautiful」を連発していたという。T君にとって大変な宝物となったが、コンクールのファンが増えたことも事実だろう。そのレコード鑑賞会を近々に開催するとの話もある。(佐伯)

未来への楽しみ

仙台国際音楽コンクールの会場、仙台市青年文化センターは私の家からバス停で3つ目という距離にあります。この土地に暮らし、この身近な場所で「未来の音楽家」が挑んでくるコンクールが開催され、その運営にボランティアとして携わることができました。そこで出会った音楽と素敵な人々、人が一生のうちで出会うことのできる人の数には限りがあると思います。その限られた中で「今この時、仙台でない」と感じない」というものを持ちながら仙台国際音楽コンクールに、これからも聴衆やボランティアとして関わっていくことができたいと思っています。老後の楽しみっていうと、まだまだ先のことなんて思

っていましたが「10年後の自分って何をしているのだろうか」と考えることはあっても3年後のことは考えたこともありませんでした。人は1年に一つずつ歳をとりますが、3年ごとに開催されるこのコンクールは3年で一つずつ歳を重ねていきます。ある時「ああ、前のコンクールの時は子供だったのに、すっかり成長して」という言葉を耳にしました。3年でどれだけ育つことができるのか、そう思うと女性の立場では仕事・結婚・出産・育児・介護と3年の間に経験するであろうことは枚挙にいとまがないのですが、私の場合「仙台国際音楽コンクール」もその一つ、自分のライフワークのようなものとして老後だけではない「未来への楽しみ」にならばと思っています。(佐藤)

協働 そして 第3回目へ

どれだけの方がコンクールを聴かれたのだろうか。関心や興味を新たに持った人は増えたのだろうか。出場者が実力を発揮できる環境を準備できたのだろうか。在仙中の居心地はどうだったのだろうか。この思いを叶える一助になるため各自が持っている能力を出し合っていくと活動開始。広報宣伝サポートボランティアとしての初会合は昨年6月でした。ボランティア委員としては、以前から出ていたものの、全員お初の顔合わせでした。20～60代25名、パワー溢れる面々で頼もしい限りでした。第1回目の活動内容をほぼ踏襲しつつ、新アイデアを加えていくと一致。具体的には、1. 出場者への「滞在のしおり」発行 2. コンクールアピールのためのコンクールニュース「コンチェルト」の発行 3. 小中学生徒への「鑑賞のしおり」発行 4. 仙台国際音楽コンクールのホームページ一部担当 5. 関連イベントの取材記事作成 6. 各作成物の発送配布作業などです。パソコンを駆使した作業はグループで分担し同時並行で、その結果をほぼ毎週水曜日に持ち寄り全体で照らし合わせては進むという方法を取りました。「滞在のしおり」は出場者に少しでも快適に過ごしてもらえるよう、日・英訳別4部構成の仙台ライフのガイドブックのようなものとなりました。第1回目既刊の改訂版ぐらいに考えていたのですが、出場者の宿

泊場所も変わり、周辺の地図作成、施設、店舗取材など新たな部分が多く、かなりの日数をかけました。英訳は出場者サポートボランティアの方々とネイティブの方にご協力いただきました。デザイン、編集、入力、校正、印刷、製本全てを自力でと思っていたところ、印刷だけはプロに依頼できるとのことで、一同安堵したものでした。ただ、日・英訳合わせて100頁余の700部の製本にはホールの消却時間も惧めしい程、予想以上の時間がかりかり全員へとへとになりながらも、大きな達成感を皆で感じ合うことができました。途中メンバーもいろいろな事情で減り、まとめ役としては心配が尽きなかったのですが、気分転換の懇親会などを経お互いを知り合い、活動の厳しさ、楽しさを増していくことができたように思います。事務局との確め合いも数知れず、個々人の問い合わせにも面倒がらず細かく対応してもらい、ほんとうによくお付き合い下さったと頭が下がります。他部門のサポートボランティアに比べ、本番期間は聴衆に成りきることもでき、みんな出場者との思い出もできたようです。ボランティア参加の動機はそれぞれに違っても、仙台市の一大事業への市民参加であり、官民協働であったと思います。きっと市民の文化度向上の一役を担わせてもらったのではと、いく分誇りです。第3回目への橋渡しも活動の続きと思って、次なる行動を考えております。全てに感謝しつつ。(三田)

心がやさしくなるもの・・・?

とうとうコンクールが終わってしまいました。広報宣伝サポートボランティアの活動は、約1年前からほぼ毎週水曜日、編集会議をしてきました。青年文化センターの地下1階の事務局で、夕方6時から始まるその編集会議は幅広い年齢層のメンバーが賑やかに、そして真剣に原稿チェック、印刷、折込みの準備などをしてきました。原稿の締切りや、夜遅くまでの印刷などで苦しい時もありましたが、インタビュー取材など貴重な経験も多く、また、広報メンバーのそれぞれの時間をやりくりしての、真剣な仕事振りにすっかり魅せられているうちに、あっという間にゴールが来てしまったという感じです。今となつては、自分にとって本当にかげがえのない日々でしたが、ボランテ

ィア活動を始めた頃は達成感のような何かを期待して、空しくなる瞬間が来るのではと自分の意志がぐらつくことばかり考えていました。それでも続けることができたのは、コンクールに携わった方達みなさんが、心のこもった仕事をしていると感じたからでした。コンクールが始まって、ありとあらゆる国の若い出場者達のために、言葉の代わりに善意を通じ合わせて、一生懸命働く姿はすばらしいものでした。そういう意味で、ボランティア活動をする環境にとっても恵まれていたと言えます。ある出場者が「自分にとって音楽とは、心がやさしくなるもの」と言っていました。今、私もそんな気持ちでいっぱいです。(橋山)

編集後記 文字ばかりの号になってしまい読んでいただけるかと心配です。広報宣伝サポートボランティア全員がコンクールの期間を通して活動し、そこから得た経験や思いで溢れております。あたかも13名の狂詩曲です。毎号巻末の川柳もその1名の作です。本紙はこれで最終号となりますが、未定ながら第3回への架け橋としての続号も考慮中です。また、お目にとめていただける日を信じて、しばしお別れを。(三)

～ ボランティア 再会約す 別れかな ～ (長内)

あつという間の1年

私たちのボランティア活動もいよいよファイナルになりました。あつという間の一年。新しい体験と話にワクワクする毎日でした。特にヴァイオリン部門のロマン・フラニチカさんと一緒に行った七郷小学校の学校訪問コンサートの取材は楽しい思い出の一つになりまし

た。また、「コンチェルト」や「滞在のしおり」に書かせていただいたつたない記事など忘れられません。音楽は何とすばらしいものではありませんか。いろいろな環境の方々を知り合いになって、本当に楽しい一年でした。(佐藤寿)

ボランティアからの情報発信

コンクールというものにおよそ興味がありませんでした。それがなぜ参加してみようと思ったのか…。ホームページ作成講座のパソコン教室に通っていた時、ボランティア募集のポスターが教室の入り口に貼ってありました。広報活動の欄が目にとまりました。今まで学習したことをやってみようと思いました。2003年の6月から「滞在のしおり」、コンクールニュース「コンチェルト」、公式ホームページ「ボランティアの部屋」などに関わってきました。毎週1回の定例の編集会議では、多くの市民にコンクールに参加してもらうにはと、活発な議論が交わされました。それは、コンクールの良さを知ると共に、ひとつの目的を果たすために集まったグループの良さを体験できる場

もありました。意見があつたらその場で話し合う、不満など多方面を提案する。それは、一見当たり前にも思えますが、現実にはなかなか難しいことです。何でも話し合える雰囲気、一人ひとりの意見が尊重されたボランティアに参加でき人間的に成長できたと思います。コンクールに興味がなかったのは芸術に優劣をつけることはできないと思っていたのです。でも、出場者の方々はコンクールに目標を定め、練習し、プレッシャーを逆に弾みに素晴らしい演奏を披露してくれました。演奏会とは趣きが違うコンクールを堪能できたことは幸せでした。この素晴らしい「仙台国際音楽コンクール」を、仙台市民みんなのものにするための情報をボランティアとして伝えていけるようになりたいと思いました。(佐藤純)

感動と感謝の内に終わったボランティア

コンクールニュース「コンチェルト Vol.2」の編集、学校訪問コンサートの取材、印刷・梱包作業、チラシ折込みなどの活動に参加しました。その中でも学校訪問コンサートの取材とチラシ折込みは特に楽しい経験となりました。ヴァイオリン部門のニコラ・ドートリクールさんに同行した高砂小学校の学校訪問では、子どもたちの笑顔とニコラさんとの心のふれあいがとても印象深く、レポートも一気に書き上げることができました。チラシ折込みは、テーブルに並べられたたく

さんのチラシを1枚ずつ取りプログラムにはさみ込む作業です。何度かやっているうちにリズムよく1枚ずつ取っていく要領がわかってきましたので、とてもスムーズに作業ができるようになりました。コンクールでは、大好きな“協奏曲”を心ゆくまで聴くことができ、感動し幸せを感じました。ボランティア仲間との友情と出場者との楽しい交流に支えられて無事に活動を終えることができ、今は感謝の気持ちでいっぱいです。(林田)

愛あり笑いあり涙あり「コンチェルト」発行

約1年間の活動で一番の大仕事だったのがコンクールニュース「コンチェルト」の編集発行です。私は仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者の原田哲男さんのインタビューを掲載したVol.3の担当でした。インタビューではどんな質問をしたら読者に満足してもらえるか、またインタビュー最中は明るく盛り上げたものが真面目に淡々と聞いた方がいいものか。初めてのことにひとしきり悩みつつ緊張して当日を迎えましたが、原田さんはこちらのつたない質問に親切に

答えてくださり、大々満足でした。それからインタビューを記事にするための作業をし、他の記事の作成やレイアウトに手こずり、他のボランティアの皆さんからは容赦ないダメだしをされながら、制作期間約2ヶ月、苦勞の末の発行となりました。手前味噌ですが、コンクールを応援してくださる市民の方々や、仙台フィルハーモニー管弦楽団のファンの方々に満足いただけるものになったのではないかと思います。ご協力いただいた皆さん、どうもありがとうございました!(堀川)